

「おじさん」に捧げるバラード

『とんかつ フクちゃん』

私が大学時代にバイトしていたトンカツ店です。

大学キャンパスの西門へ続く商店街で、1970年から2004年まで30年以上にわたって営業していた、多くの学生にこよなく愛され、当時その店の名前を知らない学生は皆無だったと思うほどの名物店でした。

『チートン』と『チーメン』

「チートン」とは「チーズ入りトンカツ」の、「チーメン」とは「チーズ入りメンチ」の通称で、その店の人気の二枚看板でした。しかし、それ以上にその店の評判を広めたのが、それ以外の変わり種メニューの存在です。

具体的には、「チョコレート入りトンカツ」（通称：チョコトン）、「納豆入りメンチ」「バナナ入りメンチ」「大根おろしトンカツ」などもメニューにラインナップし、冬場の1リットルとん汁というのも名物でした。

「チートン」・「チーメン」の注文がダントツでしたが、話の種にとの興味本位で「チョコトン」目当てに店を訪れる客も少なからずいたものです。

客として、またバイトのまかないとしてすべてのメニューを食した経験をもつ数少ない一人である私の感想としては、「チョコトン」「バナナメンチ」は確かに話の種で食べてもリピートするには躊躇するレベルですが、その他はもちろん美味しくいただきました。個人的には、納豆メンチがイチオシの私でした。

当時は、トンカツ類の定食が500円強、メンチ類の定食が450円強円だったと記憶しています。学生にとっては手頃な価格でボリュームもあったので、特に体育会系の学生には人気でした。昨年プロ野球の日本一に輝いた「アレ」のO監督や、オリンピック3連続大会

(内1回は日本はボイコット) マラソン代表のレジェンドである現陸上競技連盟理事のSさんも学生時代に出入りしていたお気に入り店です。その他にも、後にプロスポーツやオリンピック選手となる当時学生だった多くの人の胃袋を十分に満たしてくれた存在の店でもありました。そして、有名人や芸能人が度々食レポに訪れ、テレビや雑誌などに何度も取り上げられたものです。

私も、取材に訪れるテレビでよく見るタレントを、何度か店に迎え入れたことがあります。次のエピソードは、私がバイトをする前のことですが、店主の「おじさん」が何度も何度も私に聞かせてくれた内容です。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

「ある日、テレビの取材で、ある芸能人がいきなり店にやってきてね。スタッフからも出演する芸能人からも取材の最初と最後に最低限のまともな挨拶なんて何一つなくて、俺が出したトンカツを手づかみでとって一口食って、わけもわからないコメント一言つぶやいて、さっさと店を出て行って帰っていった奴がいるよ。

俺が心を込めて毎日提供している大事なものを乱暴に扱いやがって。とにかく慇懃無礼極まりない奴だった。アイツだけは許せない。テレビの世界では、いい人の典型の愛されキャラとして人気者のようだけど、あんな鼻もちならない人間が大人気ドラマの教師役なんて笑っちゃうよ」

かつて、主人公で出演した中学校の学園もののドラマが高視聴率を記録し、その番組の主題歌も卒業ソングの定番として大ヒットするなど、テレビや映画にも引っ張りだこだった、長い髪がトレードマークのその人は、今でも元気に芸能界で活躍中です。

あくまで一場面だけを切り取ったのおじさんの主観の内容を聞き及んだ話であり、ここでは、この芸能人の方の素顔や日常での人間性をうんぬんすることは、脇に置いておくとします。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

私が所属していたクラブの4年上の先輩がその店でバイトを始めたきっかけで、その後、私も含めた私たちのクラブの歴代何人もの仲間が、長年その店のバイトを務めることになりました。その店で先輩が後輩に食事をおごったり、一緒に仲間で昼食や夕飯をとる機会も多く、さながら我々クラブの「第二部室」「梁山泊」「憩いとやすらぎの場」であったと思います。

自分も自分が所属していたクラブ自体も、店のおじさんとおばさんに、とてもかわいがってもらいました。個性的なキャラクター揃いの部員や自由闊達で風通しの良いクラブの雰囲気をととても気に入ってくれていたのです。

卒業してからも、私のところに、折にふれて電話をくれたものです。

「貝塚君、元気？今日、貝塚君が中3の時の担任だったっていう教え子の学生が、わざわざお店に食べに来てくれたよ」

「貝塚君、元気？貝塚君のクラブの仲間が大勢で店に寄ってきてさ。早々に店を閉めて、今みんな飲んで騒いでいるよ。貝塚君の噂話で盛り上がっているよ」

「貝塚君、元気？新潟で大きい地震あったけど大丈夫だった？貝塚君なら何があっても平気か、ハハハ」

「貝塚君、元気？今度ニューヨークで働くんだって？しばらく会えなくて寂しくなるね」

「貝塚君、元気？まだ学校の先生続いているの？え！貝塚君が校長先生？マジ？マジ？」

去る11月16日、このおじさんとおばさん夫婦を囲む会が東京で開かれ、この時のために、日本全国から何代にもわたる30人ものクラブの仲間が集まりました。

気が付けば、おじさんも齢84。私自身は1年前にも二人きりでお会いして以来でしたが、「貝塚君、元気だった？学校の先生はあと何年？」といつもものように笑顔で声をかけてくれながらも、昔を懐かしんで何度も涙ぐむ姿に接して、ともに若かりし頃の思い出の日々がものすごい勢いで脳裏を駆け巡りました。

人生の最後に一番何が食べたいかと問われれば、今では、おふくろの味一番の母のけんちん汁と、おじさんがつくってくれるトンカツやメンチを天秤にかけなければなりません。親戚の皆さんには申し訳ないですが、私にとっての真の「おじさん」「おばさん」は、「とんかつ フクちゃん」の「おじさん」「おばさん」なのです。

これまで子どもたちにも何度も訴えてきたことですが、どんなにいきがっても、どんなに強がっても、人間には、自分を愛し・応援し・励ましてくれる人の存在が必要なのです。そして、そのためにも、周囲から愛され・応援され・励まされる人間をめざすべきです。

そして、そういう子どもたちを育てる我々教師も、多くの人生経験といろんな人間との出会いを大切にしながら、常に自己啓発に励み豊かな人間性を培ってもらいたいと願います。ブラックと揶揄され教員のなり手不足が叫ばれる昨今ですが、教師をめざす皆さんには、自由になる時間がまだまだあるうちに、なおさらそう願うばかりです。

その集まりの翌日、おじさんにお礼の電話を入れました。

「今度新潟の温泉におじさんとおばさんを招待するから必ず来てよ。新幹線代も宿泊代も俺がもつから。長生きしてよね」と。私の大学時代の父親・母親代わりであり、私の青春時代を支えてくれたおじさんとおばさんへの感謝の気持ちを込めた、私なりのささやかな「贈る言葉」でした。

因みに、本稿は、「101回目の校長だより」です。